

## 1DKでの孤独と死、そして尊厳：「東京桐ヶ丘都営団地」の高齢化と建替えのエスノグラフィー

その他のタイトル	Loneliness, Death and Dignity in 1DK : An Ethnography on Aging and Reconstruction of Kirigaoka Public Housing in Tokyo
著者	朴 承賢
学位授与年月日	2016-05-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00075135">http://doi.org/10.15083/00075135</a>

## 論文の内容の要旨

1DK での孤独と死、そして尊厳：  
「東京桐ヶ丘都営団地」の高齢化と建替えのエスノグラフィー  
Loneliness, Death and Dignity in 1DK :  
An Ethnography on Aging and Reconstruction of *Kirigaoka Public Housing* in Tokyo

朴承賢  
PARK SEUNG HYUN

本稿は東京都北区「桐ヶ丘都営団地」でのフィールドワークを通じて、住民の高齢化、建替えによる建造環境の変化や移転、住居福祉の後退という複合的な変化に焦点を当て、桐ヶ丘団地で暮らす人びとの生活世界を明らかにすることを目指すものである。特に、「建替えで団地が完全に変わった」という住民たちの発言の意味を追究して、建替えがもたらす高齢住民の社会的孤立の問題を明確にし、「孤独死」に至る現代都市住居における孤独の問題を焦点化した。

戦後の「団地経営」とは、緑地の高層住宅からなるユートピアの空間計画であって、1950年代から70年代前半にかけての「憧れの団地」とはそのユートピア的な住居への期待が込められているものであった。しかし、ユートピアは、団地入居の競争率が物語るように、資本に包摂され、商品化されやすい空間でもあった。「団地族」、「団地ライフ」がつい「消費する家族」に繋がって行ってしまったことは偶然ではないだろう。今日において、住宅とは、住宅政策や資本の支配下に置かれた明白な資本主義的商品であり、この中で、人びとの日常実践は都市計画者が立てた空間秩序に圧倒されてしまう。

にもかかわらず、依然として住居は居住者の「持続的な日常生活の場所」として存在する、実存の空間でもある。また、フーコーの述べるヘテロトピアが権力諸関係への抵抗やその解体の可能性を内包する空間であるならば、日常生活の場所こそヘテロトピアの可能性が常に潜在し、隠

されている空間である。このような立場から、本稿では、桐ヶ丘団地という空間に刻まれている「空間支配」の歴史を遡る一方、日常生活の多様な層位を繊細に読み解くことで、日常的な「空間実践」の限界と可能性を明らかにすることを目指した。また、徹底した住宅計画や官僚制的な福祉制度が日常生活を縛る桐ヶ丘団地という空間の中で、ヘテロトピアの手掛かりを探ることで、近代的住居計画、そのユートピアの夢と窮状を議論した。

筆者がフィールドワークを行ってきた地域は、東京都北区に位置する桐ヶ丘都営団地である。桐ヶ丘団地は北区桐ヶ丘 1、2 丁目に所在し、1954 年から 1976 年までに建設された、総 5,020 戸の大規模住宅団地である。桐ヶ丘団地に古くから住んでいる住民たちは、「今は想像もできないだろうが、子供が山ほど多かった」という言葉で、「子育ての時代」を楽しそうに回想した。「古い住民たち」が共有する暮らしの歴史は、団地コミュニティの基盤でもある。しかし、団地建設から 70 年余りの時間が経過した今の桐ヶ丘団地は、高齢化率が 50%を超える地域となっており、自治会の役員たちは「これ以上高齢化すると自治会は維持できない」と桐ヶ丘団地の高齢化の深刻性を語っていた。

本稿では、団地の高齢化をめぐる諸現象を議論するため、まず、近代日本における家族や住居規範の変容に着目し、その最も重要な動力としての国家主導の家族・住宅政策を検討した。また、「家族中心」、「持ち家中心」となっている戦後の公共住宅政策の中で、公営住宅が社会的にいかに位置づけられたのかを追究し、新自由主義的政策における住宅福祉の後退過程を明らかにした。それを踏まえ、戦後の公営住宅が「底辺の階層を置き去って」「日本の再建に役立つ家庭の活力を養う」国民住宅として位置付けられたことと、最近の公営住宅が「老人施設化」したと批判されるに至った過程を対照的に提示した。このような政策的方向の逆転は、日本社会における住居福祉が、社会基盤政策として十分に成熟されず、経済状況に左右され、市場を補完するものであったことを示す。

桐ヶ丘団地の暮らしがさらに関心を引くのは、現在団地で行われている建替えに対して、住民たちが「建替えで団地が完全に変わった」と話していたためである。1996 年から始まった建替えやそれに伴う移転により、自治会の揺らぎをはじめ、団地コミュニティはひっそりと沈んでいる。ドアを開け出入りするとき、もしくは洗濯物を干しにベランダに出たとき、偶然に出会って立ち話することこそが住民たちの慣れ親しんだ対話の方式であるため、住民たちは、「近くても一棟違うと隣り近所がまるきり違う」と語る。建替えによる移転は、近隣の住民どうしの日常的な相互作用を急激に萎縮させたが、そのあり様をエスノグラフィックに詳述した。

建替えによる最も大きな変化であり、住民たちが建替えにおいて最も不満を表す問題は、40%に及ぶ 1DK の建設、また「一人暮らしは 1DK へ」という移転の規則である。「団地サイズ」2DK が「標準家族」の空間であったなら、1DK はその家族時代が終わってから残された「個人」を容れる住まいである。1DK への抵抗は、単なる狭小の問題だけではなく、居住者以外の存在を受け入れる空間的な配慮がない、閉鎖的な空間がもたらす孤立や孤独への問題提起でもある。機能的合理性や低費用を最優先の課題とする新自由主義的な建替えの方向の中で、桐ヶ丘団地は、1DK にふさわしい生活以上の生き方を想像しにくい「個」の世界となっており、孤独が日常化した空

間となりつつある。

建替えによって、私的空間と公的空間の分離がさらに徹底したものとなっている中で、新築区域においては、個人が育ててきた公用空間の庭がなくなっている。それは、日常生活を支える社会的資本が蓄積される空間的な可能性がいかに無力なものになっているのかを示す。高齢化と建替えがともに進んでいる桐ヶ丘団地は、「没場所性」を誘発する源泉としての技術と権力へ無防備にさらされているのだ。「建替えが終わる頃には私はもう死んでこの世にはいない」という住民たちの言葉には、この空間がもたらす疎外の問題が現れている。「税金で贅沢な家は作れない」という東京都の立場、また「税金にお世話になっている」との住民の表現は、住宅福祉が日本社会の中でいかに位置づけられてきたのかを示す言葉でもある。

本論文後半で焦点として浮び上がった「孤独死」への不安は、桐ヶ丘団地の住民たちが感じている日常的な孤独の問題を露骨に表している。閉ざされた家の中から広がる異臭によって発見され、「公共」が関与する死は、人類がいまだかつて経験したことのない死の姿である。人びとは「自立」した成人の「自己責任」の私的領域で、誰かが死に至るまで途方もなく孤立されていたことに当惑した。孤独死とは、生の中から追い払われていた死が、異臭とともに日常を侵犯した「現代的な死」の「転倒」であり、「退化」であると同時に、個人主義の「極限」であるといえるだろう。

本稿では、「孤独死が最も怖い」と語る住居たちの発言を出発点とし、孤独な死こそ他者に依存する死であるとの立場から孤独死の意味を考究した。孤独死の異臭が広がらないうちに誰かに発見されるための住民たちの工夫からも見られるように、人びとは死後を想像する中でも他人の存在を意識し、尊厳の傷つけられた不名誉な死を恐れる。人の生が他人の存在を必要とするように、人の死も他人との関係の中に置かれているのだ。墓の無縁化や直葬のような葬式の簡略化が大幅に進んでいる中で、葬式無用論が大衆の関心を集めているにもかかわらず、最近の尊厳ある死への関心、自分の死を省察する諸実践から見てとれるように、死がまともに位置づけられずには、死を取り囲んでいる生の領域をまともに生きることもできないということが切実な問題として顕在化している。

現代社会において、「自立」とは老年の文化的理想でもあり、内面化された望ましい生き方でもある。日本社会においては、迷惑をかけることに対する懸念により、自立することはさらに重い意味を持つ。自立とは、自立しているからこそ可能な人間的な尊厳の問題でもあるのだ。一般に、自立とは、他人に依存せずに自律的に生活することが可能な状態を意味する。しかし、ある住民のといった「(自分の状態を) 周りに知らせたくないから、救急車を呼ぶな」という態度は、「自立」の神話がいかに虚構的なものであるかを示す。

孤独がもたらした団地での様々な事件を通じて、住民たちは、「最後は自分で始末できないものだ」と、他人の存在に新たな意味を与えている。それは、「相互関係」の中からこそ「自立」の契機を求めようとする新たな認識でもある。地域に開かれていたグループやサークル活動など、「マイホーム」の境界を越える他者とのつながりは、自立の基盤としての「地域」の意味を深めている。

2014年11月頃、個人耕作禁止がさらに目立つ新築号館の前に、この季節には珍しく花が植えられていた。小石で自身が植えたものを囲んでおいた小庭であった。偶然にも水まきに出る彼女に会うようになったが、彼女は近隣の友人たちも呼んで気軽に筆者を自宅へ招待してくれた。豊かな近隣関係を持つことは、「好きだから勝手に」空き地に花を植えることと無関係なものではないと思われた。親密な領域を拡張させ、公用空間に自分の庭を育てる行為は、疎外されない生の可能性を主張する「領有」のきっかけであり、コモンズの可能性を模索することでさらなる意味を持つ。地域に根を下した人たちが共有する生活世界の歴史からこそ、空間を自分のものにする可能性は切り拓かれる。「生きられた空間」は新たな社会関係の獲得を通して現実化される空間であり、その関係の中で掬い上げられる総体的経験こそが、権力者や都市計画者たちによってつくられる空間的秩序や社会的排除に対する抵抗と転覆の糸口であるだろう。なぜ人類が長い老年の孤独を堪えなければならないのだろうか。